

## 令和4年度 第1回都市地域セミナー開催報告

### —「地域のよりどころを守り、支える新たな取り組み」

窪田 映子 公益社団法人 日本都市計画学会北海道支部 幹事

#### 1. はじめに

北海道支部では、令和3年度から「よりどころ」を共通テーマとして学会活動を推進している。

本テーマに基づき、令和5年3月15日(水)、神奈川県愛甲群愛川町 社会福祉法人愛川舜寿会 常務理事の馬場拓也氏を招き、都市地域セミナーを開催した。

#### 2. 人と人が接続できる中間領域をつくる

愛川舜寿会では、地域に開かれた老人介護施設、障がいのある子も無い子も一緒に過ごすインクルーシブ型の保育園、複合型福祉施設である地域共生文化拠点「春日台センターセンター」の運営事業を展開。

馬場氏は、自身の経験から、障がい者などへの偏見は、いくら言葉で「人権・尊厳」と唱えても、肌感覚で感じなければわからない。肌感覚でわかる社会をつくるには、人と人が接続できる中間領域「バッファー」が大事だという理念のもと、ビルディングタイプの施設介護から脱却し、物理的にも精神的にも地域と施設を隔てる「壁」を取り壊すことから始める。

物理的な「壁」の代わりに、地域社会に接続する「庭」を整備し、入居者の「ケ(日常)」の中の小さな「ハレ(好きな場所でパイプをくぐらせる、美味しい一杯のビールを飲むなど)」の場として、入居者の地域生活の連続性を守っている。

精神的な「壁」は、地域から見える関係性をつくったことに加え、職員が入居者を管理するという構図から、人を人として見ていくということをきめ細かな空間づくりを通して職員と共有しながら払拭している。

これは、誰もが迎える老後や、何らかの身体的精神的疾患を負ったとしても、その人がその人らしく人生を全うできる環境を提供している。



馬場拓也氏によるご講演の様子

#### 3. 福祉を起点とした地域コミュニティの再構築

地域共生文化拠点「春日台センターセンター」は、グループホーム、デイケアセンター、小規模多機能型居宅介護施設、就労継続支援洗濯代行、コインランドリー&カフェ、コロケスタンド、多目的スペースからなる複合施設で、施設の構想からオープンまで、6年の歳月がかかっている。

検討プロセスでは、通称「あいラボ」という、個人と顔でつながる、来ても来なくても良い能動的な会を結成し、対話・雑談を重ね、地域課題や魅力的な資源、プレイヤーを見出し、それらをネットワークさせながら、ただの箱モノではない、地域の人々を巻き込んだ中身の詰まった事業として組み立てている。

ここでも、中間領域として、縁側・軒下・土間空間を丁寧につくりこみ、また、制度上の居住スペースを昼間は地域に開放することで、施設のそこかしこで、子どもが遊び、学生が勉強し、外国人や若者が集い、職員が休憩をとり、お年寄りが腰かけながらおしゃべりをし、挨拶をかわし、働く障がい者の姿を見ることが出来る。コロナ下に訪れた誰もが「やっぱりこういうことだよな」と漏らす共生の姿を具現化している。

ここでは禁止ルールは作っていない。問題が起きた時は、あらゆることをコミュニケーションで解決する。サービスプロバイダーとしてのケアではなく、ここ(地域)に帰属意識を持ち、人・コミュニティに向き合いながら、折り合いをつけていくことで、世代を跨いだ「よりどころ」を育んでいる。

#### 4. おわりに

人は居心地の良い空間に集まり空間によって人の行動は変わるといった建築・デザインの重要性、地域課題や魅力・障がいの有無によらない人的資源を繋ぎ事業を組み立てる構築力、社会的な寛容性を育む徹底的なコミュニケーション、ここに通う子どもたちが20年後には普通に多様性を受け入れている未来を見据える想像力など、まちの「よりどころ」を考えていくことで多くの示唆をいただいたセミナーとなった。

講師の馬場様、司会を務められた小篠副支部長をはじめ、ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。